

奈良県立医科大学附属図書館における闘病記文庫の設置

川村 殉子*

奈良県立図書館情報館（執筆時：奈良県立医科大学附属図書館）

I. はじめに

奈良県立医科大学附属図書館（以下、当館）では、2008年3月に闘病記文庫を開設した。開設の経緯や準備内容、また、開設後は看護学科生や医学科生の闘病記利用が増加した利用状況について報告する。

II. 当館の概要

奈良県立医科大学は医学部のみ単科大学であり、2007年4月から公立大学法人となった。当館はその附属図書館である。

利用対象者は主に学内の構成員で、医学部医学科生約600名、看護学科生約330名、そして附属病院を含む教職員約1,300名である。

看護学科には看護系資料を中心に揃えた看護分室があったが、2005年に当館へ資料を移し閉室した。2005年以降、学内の図書館サービスは当館に一本化された。

III. 開設までの経緯

1. 開設スケジュール

開設までの準備は以下のとおりおこなった。

2007年10月	学生から闘病記文庫開設の要望を受け開設について検討する
2007年12月	当館が所蔵する闘病記の冊数を調査する
2008年1月	図書委員会にはかり、闘病記文庫開設の承認を得る
2008年2月	闘病記の収集、登録、装備をおこなう
2008年3月	闘病記文庫のスペースを確保、整備する
2008年3月10日	闘病記文庫を開設する

2. 開設のきっかけ

2007年10月に、当時医学部医学科3年生であった学

生から闘病記文庫開設の要望を受けた。この学生は闘病記文庫の必要性を次のように当館に訴えてきた。

「患者さんは、疾病への不安や治療についての不満など思っていることがあっても、わずかな診察時間にしか接することのない医師にはなかなか本音を伝えにくいものである。しかし、医師が患者さんによって書かれた闘病記を読むことによって、本音を言いにくい患者さんの気持ちに少しでも気がついたり理解したりする手助けとなるのではないだろうか。ただし個人で闘病記を収集すると、選書における好みや分野による得手不得手の偏りが出てしまう。また本を置くスペースや費用の負担もかかる。図書館が文庫として提供できれば、誰でも利用することができるのではないかと。」

さらに「学生が学ぶべきことは膨大にあるが、講義やテキストでは扱われないこともある。ある治療が患者さんにどのような影響を及ぼすのか、精神的負担や身体的負担以外にも、経済的負担や社会的立場の変化による負担など、闘病記を読むことによってはじめてわかることも多い。」と医師を目指す学生の立場として、闘病記に寄せる思いを語ってくれた。

3. ナラティブ・ベイスド・メディスン Narrative-Based Medicine

闘病記は当館としても注目していた資料群であった。闘病記は患者さんやその家族が病に直面した思いや悩みが率直に綴られている。病や障害をいかに克服するか、また治療や闘病生活への不安、死の恐怖や生きる心の支えなど、当事者でしかわかりえない情報が描写されている。

告知やインフォームドコンセントが社会的に広まり、患者さんが抱える病の背景を理解し、患者さんの意思を反映させる医療が求められるようになってきた中、最近では「Narrative-Based Medicine」に関心が高まっている。「Narrative」とは「語り」や「物語り」と訳されるが、「患者」の語りに注目し、臨床の医療における“患者”中心の医療を推進しようとする方法論である¹⁾。

*Junko KAWAMURA : 〒630-8135 奈良県奈良市大安寺西1丁目1000番地. Tel.0742-34-2111 Fax.0742-34-2777 kawamura@library.pref.nara.jp (2009年2月27日 受理)

過密スケジュールに追われ患者さんと十分なコミュニケーションが取れない医療者や、将来医療者になるべく勉学に励む学生にとって、患者さん自身によって書かれた闘病記を読むことは患者さんの気持ちを知る一助になるのではないかと考えた。

利用者から要望があったこと、当館が注目していた資料群であったことを踏まえて、闘病記文庫の開設に向けて準備を進めることとなった。

IV. 開設の準備

1. 健康情報棚プロジェクト

実際の開設準備にあたっては、健康情報棚プロジェクトにご指導、ご協力をいただいた。健康情報棚プロジェクトとは「健康や病気に関するわかりやすい本や資料を集め、誰でも手にとって見ることが出来る本棚（書架）を全国に設置する目的で結成された民間研究プロジェクト」である²⁾。

健康情報棚プロジェクトでは、公共図書館で闘病記をわかりやすく提供するための「闘病記文庫 棚作成ガイドライン³⁾（以下、ガイドライン）」を作成されており、当館はおおむねこのガイドラインに沿って準備にあたった。

2. 散在する闘病記

当館では一部を除き図書を日本十進分類法で配架している。既に所蔵していた闘病記は、医学分野の倫理・哲学や各疾病、また文学分野のエッセイや小説、他に芸術分野に分類され、資料群としての闘病記は散在している状況であった。さらに闘病記は、羅っている疾病名を書名に使用しないことが多いため、当館OPACでの効率的な検索は難しかった。

しかし、患者さんは自分と同じ疾病の方の闘病記を読みたいと思い、医療者は自分が担当する患者さんと同じ疾病の方の闘病記を探している。

3. 疾病ごとの分類

健康情報棚プロジェクトでは、様々な分類で配架されている闘病記を1ヵ所にまとめて具体的な疾病名で分類することで、利用者にとってわかりやすくなると提案している⁴⁾。

ガイドラインでは、疾病をまず「がん、小児がん、疾病、脳、障害、心臓、精神」の7つに大分類し、さらに各大分類のもとで疾病ごとに小分類する。例えば大分類「疾病」では「疾病1：ADA欠損症」から「疾病134：リウマチ熱」まで具体的な疾病名のついた小分類にわかれる³⁾。

当館では大分類に「小児疾病」と「その他」を加えた。

4. 資料の入手

まず当館で散在している闘病記を集めた。実際にブックトラックを押しながら館内書架をまわり、1冊ずつ確認しながら闘病記と思われる図書を抜き出した。

ただ、既所蔵分だけでは文庫として冊数が少ないと判断し、学生用図書購入費の一部をあてて新規に購入した。選書の際には、ガイドラインに掲載されている疾病ごとの闘病記リストを大いに参考にした。しかし闘病記は絶版になることが多く、難病に関する図書や自費出版の図書は一般流通しにくい面を持っている⁵⁾。

そこで「on-line古書店 パラメディカ」で多くを購入した。パラメディカは、難病の患者さんやそのご家族向けの医療関連書、特に闘病記を集めたオンライン古書店である⁶⁾。

さらに職員が実際に地域の古本屋へ出向き購入したり、健康情報棚プロジェクトから多くの図書寄贈を受けたりして収集に努めた。

5. 資料・書架の準備

図書の登録においてはOPACで容易にキーワード検索ができるように、闘病記の大分類名、小分類名、本文中や帯に書かれている疾病名および「闘病記」をキーワードとして付与し入力することとした。

図書の装備については背に2段の請求記号ラベルを貼ることとした。当館では通常の装備に3段ラベルを使用しているが、ガイドラインではできるだけ情報を隠さないように1段ラベルを推奨しており、その中間をとった結果である。上段に大分類名と小分類番号、下段に著者記号を印字する（図1）。

購入時についている帯は利用者にとって有益な情報となることがあるので、見返しに貼るなどしてできるだけ

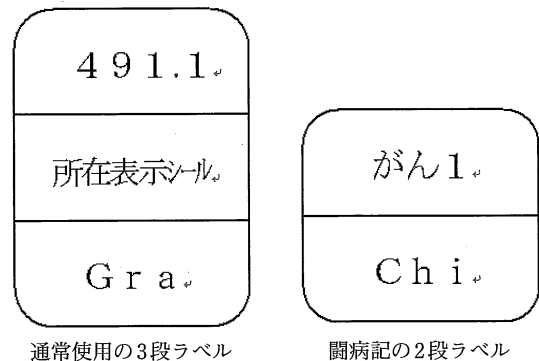


図1. 請求ラベル

残している。表紙カバーもそのまま残し、上から透明のブックカバーを貼る。

書架における分類の見出しは職員が手分けして作成した。ケントボードを購入し適当なサイズに裁断したあと、大分類名や小分類名を印字した用紙を切り貼りし、補強のためにブックカバーを貼って仕上げた(図2)。

十分な予算をかけることができない中、職員の手作りにより費用は市販品の約10分の1に抑えることができた。職員全員が加わった作業であったが、費用面だけでなく疾病の分類方法や闘病記文庫設置についての理解を共有できた点でも有意義であった。

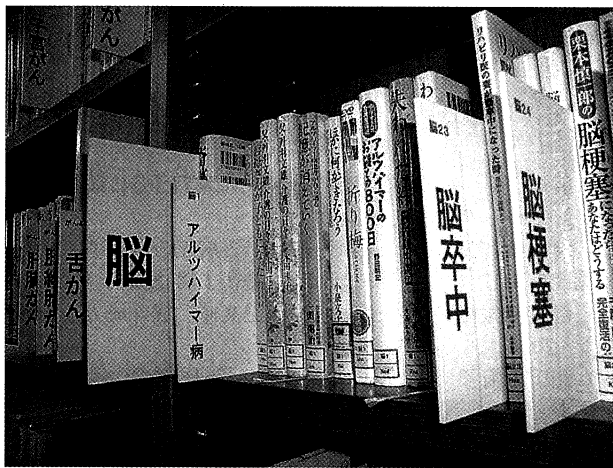


図2. 分類の見出し

V. 蔵書構成

開設から半年経った2008年9月時点で、蔵書数は374冊となった。入手別に見ると、既に所蔵していた図書が80冊(21%)、新規に購入した図書が144冊(39%)、健康情報棚プロジェクトからの寄贈が63冊(17%)、その他の方からの寄贈が87冊(23%)であった(図3)。

同じく疾病の大分類別に見ると「がん」が圧倒的に多

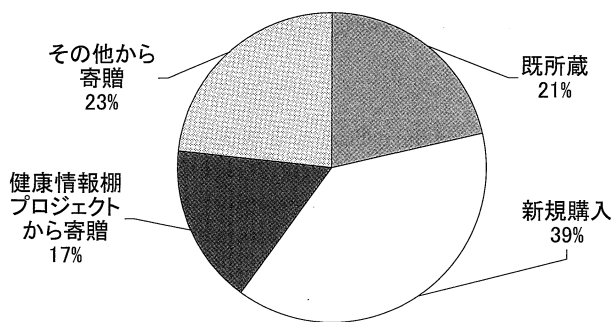
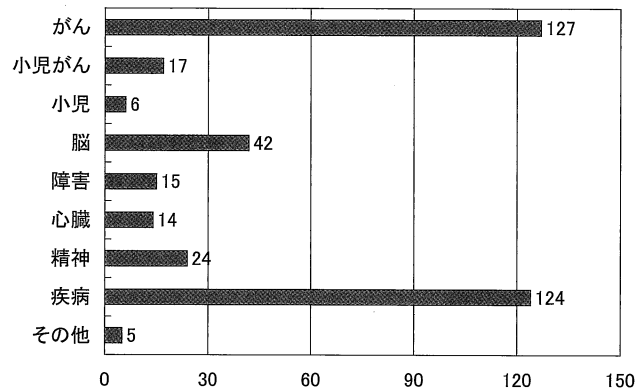


図3. 蔵書構成：入手別

い。ちなみに「疾病」が多いのは大分類名にならなかったすべての疾病を含むため、特定の疾病を内容とした闘病記が多いわけではない(表1)。

表1. 蔵書構成：大分類別(冊)



VI. 広報

広報活動は、開設した2008年3月10日直前から主に学内に向けておこなった。広報手段は学内掲示、館内掲示、ホームページ、当館公式ブログ、学内オールユーザー宛メール、学内用チラシ、学報である。

開設4ヵ月後の2008年7月にはNHK奈良の取材を受け、テレビとラジオで紹介されると学外からの問い合わせが急増した。問い合わせの内容は「学外者も閲覧できるか」「必要箇所を複写できるか」「借りられるか」というほぼこの3点であった。

現在、学外の方に対して貸し出しはしておらず、来館された方には資料の閲覧と複写のみとさせていただいている。

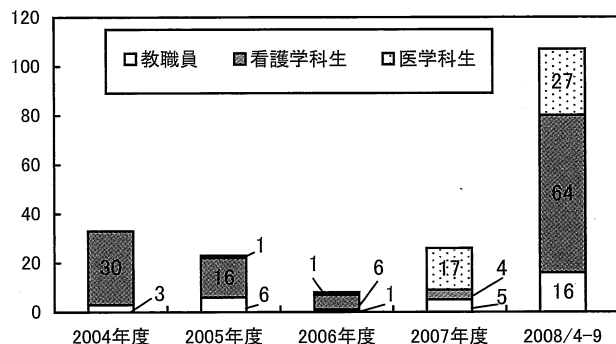
テレビやラジオでの放送は各番組内のほんの数分程度であったが、問い合わせが急増したことによりマスメディアの影響の大きさを実感した。

VII. 利用状況

開設以前の2004年度から2006年度まで過去3年間については、闘病記図書の貸し出し冊数が年間30冊を大きく超えることはなかった。しかし2007年度は1年間で26冊貸し出しのうち開設した2008年3月だけで23冊、2008年度に入り4月から9月までの半年間で100冊以上を貸し出した。

貸し出し者を身分別に見ると、ほとんど利用のなかった医学科生が開設以降は闘病記を借りるようになり、教職員も徐々に利用が増え、看護学科生については飛躍的に利用が多くなったと見てとれる(表2)。

表2. 闘病記の身分別貸出数 (冊)



VIII. 今後の課題

2008年11月時点で蔵書は400冊近くになったが、より多種にわたる疾病の闘病記を収集していく方針である。2008年7月には、利用者からの意見や要望を積極的に取り入れるためにオピニオン・ボックスを設置した。利用者からの購入リクエストも参考にして徐々に充実させていきたい。

また、闘病記文庫の存在を知った方から闘病記寄贈の申し出を受けるようになった。闘病記文庫として質の高い蔵書を維持するために、資料の収集方針や寄贈の受入基準の整備が必要である。

さらに、地域住民の方も闘病記について非常に高い関心を持っていることがわかった。医科大学図書館として地域貢献の点から闘病記の貸し出しをしたいところであるが、今のところは実現にいたっていない。その理由と

しては、資料である闘病記の冊数がまだ少ないこと、患者さんやそのご家族に利用していただくには、施設面で不備があることなどがあげられる。しかし、今後は近隣の病院や公共図書館など他機関との連携をも視野に入れて、闘病記文庫の活用について検討していきたい。

本稿は第15回医学図書館研究会・継続教育コース(2008年11月5～7日 関西医科大学)で発表した内容に加筆修正をしたものである。

謝辞

当館闘病記文庫の設置にあたりご指導・ご協力いただいた健康情報棚プロジェクトの皆様と、on-line古書店パラメディカ店主の星野史雄様に、この場を借りて感謝申し上げます。

文献

- 1) 熊本一朗. EBMとNBMを統合して実践するには. EBMジャーナル. 2006;7(1):30-3.
- 2) 健康情報棚プロジェクト. からだと病気の情報をさがす・届ける. (UDライブラリー). 東京:読書工房;2005. 奥付.
- 3) 健康情報棚プロジェクト. 闘病記文庫 棚作成ガイドライン. 2006.
- 4) 和田恵美子. 「闘病記文庫」は患者・医療者に何をもたらすか. 情報管理. 2006;49(9):499-508.
- 5) 星野史雄. 闘病記を読むことは. 健康情報棚プロジェクト. からだと病気の情報をさがす・届ける (UDライブラリー). 東京:読書工房;2005.p.174-80.
- 6) on-line古書店パラメディカ [internet]. <http://homepage3.nifty.com/paramedica/> [accessed 2009-02-13]

Opening of the Collection of “Tobyoki” at the Nara Medical University Library

Junko KAWAMURA

Nara Prefectural Library & Information Center. 1000 1-chome, Dianji-nishi, Nara-shi, Nara, 630-8135, Japan

Abstract: A student at Nara Medical University eagerly requested us to obtain a collection of “Tobyoki” books, in which patient narratives are described by the patients themselves and/or their caregivers.

We decided to provide such a collection so that the University Library users could study patients’ psychological states, such as fears and worries.

Following the guidelines provided by the “Healthcare Information Bookshelf Project”, we made preparations to obtain as many of the above-mentioned diaries and records as

possible.

Finally, we opened the collection in March 2008. Over the five months since, the number of users of this collection has rapidly increased. Our future task is to consider how the collection can be made available to the local community for improved healthcare of the community.

Key words: Narrative-Based Medicine; Patients; History; Medical Education; Nara Medical University Library
(*Igaku Toshokan*. 2009;56(2):127-130)